

高校生の学校適応と社会的スキルおよび ソーシャルサポートとの関連 ～不登校生徒との比較～

大対香奈子

Social Skills, Social Support and High School Student Adjustment : A Comparison with Truants

Kanako OTSUI

This study identified the factors that influence how high school students adjust to school and investigated how school adjustment is associated with social skills and social support. Forty high school students and 31 adolescents with a history of being absent from school participated in this study. The results indicated that peer relationship was the strongest factor that influenced whether high school students liked school. Assertion skills strongly correlated to whether high school students liked school. Additionally, it was found that social support mediated the relationship between assertion skills and students liking school. A comparison between high school students and truants showed that high school students had stronger assertion skills and social support than truants did.

Key words: school adjustment, high school students, truants, social skills, social support

問 題

2009年度の文部科学省による調査では、高校における不登校生徒数が51,728人と報告されており、そのうち中途退学になった生徒数は16,629人と、不登校生徒の32.1%にあたる（文部科学省，2010）。このように、高校での不登校生徒数は決して無視できない数字を示しているにも関わらず、高校は義務教育にあたるため、不登校生徒への支援体制が小中学校に比べて不十分であると言える。また、この時期の不登校の問題は、ひきこもりの問題へと深刻化する可能性も高いことが考えられるため、不登校を含む高校生の学校適応問題についての実態把握や、学校不適応を予防する介入の検討が急がれている。

実際には、学校に登校できている生徒であっ

ても、「学校に行くのが嫌になったことがある」という登校回避感情を経験したことがある生徒は多く、山下・清原（2004）が高校生1026人を対象に行った調査によれば、74.6%もの生徒が登校回避感情を持っていることがわかっている。また、戸田（2004）は、高校に通っている高校群と不登校を主訴として病院を受診している臨床群とで、登校回避感情を比較したところ、臨床群が登校群より有意に得点が高かったことを示した。つまり、高校に通いながらも登校回避感情の高い生徒は、不登校につながる可能性が高いハイリスクの生徒であると言える。したがって、高校生の不登校を予防するためには、生徒の登校回避感情を低め、学校適応感を高めるような介入が重要となってくる。

高校生の学校への適応感に関連する要因につ

いては、大久保(2005)により検討されている。大久保は大学進学率の異なる、男子校、女子校、共学を含む4つの高校の生徒を対象に、「友人との関係」「教師との関係」「学業」という3つの要因が学校への適応感にどのように影響しているかを検討した。その結果、友人関係については学校の特性に関係なく一貫して適応感に強い影響を与えていることがわかった。また、適応のネガティブな側面であるストレス反応に影響を及ぼす高校生活ストレスの分析を行った古屋ら(2007)の研究では、高校生が経験する教師、部活動、家庭、学業、友人、異性という6つのストレスのうち、友人ストレスがストレス反応への影響力が最も大きいことを示している。以上のような先行研究の結果から、高校生の学校適応感を高めるためには、良好な友人関係を築くことが重要であると言える。したがって、本研究の1つめの目的は、本研究で対象とした高校生においても、友人との関係が学校適応感に影響を及ぼす最も強い要因であるかを確認することである。

良好な友人関係を築き、学校適応感を高めるための具体的な介入として、これまでに広く教育現場などで実施されてきたものが、社会的スキル訓練(Social Skills Training; 以下 SST とする)である。SSTでは、訓練を受ける対象者に必要とされる社会的スキルを標的スキルとして定め、スキルに含まれる具体的な行動を教示・モデリング・強化・フィードバックといった手法を用いて対象者に訓練していく。したがって SST は、個人の能力である社会的スキルを高める介入を直接行い、その結果として仲間関係を上手く築いたり、学校への適応感を高めることを目指すものである。SST は従来、学校適応や対人関係の問題を抱えた児童生徒を対象として、個別に行われていたが、最近では、学校不適応の予防を目的として学級単位や学校単位で集団を対象に SST が実施されることも増えてきている(佐藤・佐藤・岡安・高山, 2000)。臨床的介入であれ、予防的介入であれ、SST を実施する上で重要なことの一つに、対象者にとって本当に必要とされるスキル

が標的スキルとして選ばれているかどうかという点がある。したがって、高校生を対象に有効で妥当性の高い介入を実施するためにも、高校生が友人との良好な関係を築く上で必要とする社会的スキルが何であるのか、また一般高校生と比べて不登校生徒に欠けている社会的スキルが何であるのかという点について、実態把握をすることが必要である。

社会的スキルと共に、ソーシャルサポートは、先行研究においてストレス反応を軽減させる変数として検討されてきたものである(例えば、嶋田, 1998)。ソーシャルサポートの中でも知覚されたサポートは、過去に他者からサポートを受けた経験や、親密性といった他者との関係性から生じる、他者からサポートを得る期待を表すものであり、ソーシャルサポートを高く維持できる生徒は学校不適応に陥ることが少ないと考えられている(岡安・嶋田・坂野, 1993)。したがって、ソーシャルサポートをいかに高めるかが、学校適応感を高めることにもつながると思われる。

以上に述べたように、良好な友人関係を築き、学校で経験するストレスを少なくするために、社会的スキルやソーシャルサポートは重要な要因であると言える。これら2つの要因と学校適応との関連について、高校生を対象とした先行研究で明らかにされていることは、学校適応の低い生徒よりも学校適応の高い生徒の方が社会的スキルは高いこと(浅川・東・古川, 2001)と、ソーシャルサポートを得られるほど、高校生のうつ傾向は低くなるということであった(牧野, 2006)。このように、社会的スキルとソーシャルサポートのそれぞれが高校生の適応と関連していることは分かってきているが、これら2つの要因がどのように相互に関連し、またそれがどのように高校生の学校適応に影響を及ぼしているかについては、まだ十分には検討されていない。

社会的スキルおよびソーシャルサポートと学校適応との関連については、中学生を対象としていくつか研究がされている。江村・岡安(2003)は中学1年生を対象に約半年間にわた

る集団社会的スキル教育を実施した結果、もともと社会的スキルが低く、介入によりスキルが上昇した群において、知覚された友人サポートが有意に高まったことを示した。この結果は、いくつかの解釈の可能性はある。まず1つめの解釈として、社会的スキルが改善されることで必要なサポートを上手に要請することができるようになり、その結果として他者が要請に応じてくれるというサポート環境が増えたと考えられる。また別の解釈として、この介入は集団を対象として学級単位で行われており、標的スキルにはお互いの大切さを理解し、仲間はずれがおこらない関係を作ることをねらいとした「お互いを大切にす」スキルも含まれていたことから、個人の社会的スキルの改善に関わらず、周りの友人のサポート体制が高まったということも考えられる。高校生が学校を居心地の良い場所だと感じる学校適応感を高めることを介入の最終目標とした場合に、社会的スキルの改善が直接的に学校適応感の向上につながるのであれば、社会的スキルのみを介入対象として考えることができる。もし、社会的スキルと学校適応感の間にソーシャルサポートが媒介している場合には、社会的スキルの改善がソーシャルサポートを高め、それによって学校適応感が向上すると思われる。また、江村・岡安(2003)の行った学級全体への介入のように、集団のサポート体制を高めるような直接介入も可能性として考えられるだろう。したがって、本研究の2つめの目的は、高校生の社会的スキルと学校適応感の関係において、ソーシャルサポートが媒介変数となっているかを検討することである。

登校回避感情を抱きながらも通学を続けられる生徒と、不登校に至る生徒との間には、社会的スキルやソーシャルサポートという視点でどのような違いが見られるのだろうか。登校している生徒と不登校生徒との比較を行った研究のほとんどは、中学生を対象としているものである。先行研究より明らかにされている社会的スキルの違いとして、不登校生徒は登校生徒に比べて、自分から積極的に友人関係を築くスキル

や自己主張スキルの得点が低いこと(曾山・本間・谷口, 2004)、また自己主張の中でも他者からの働きかけに対する応答としての自己主張や自己表現はできるが、自分から進んで自分の感情や意見、希望を他者に伝えようとする積極的な自己主張が苦手であること(朝重・小椋, 2001)が指摘されている。江村・岡安(2003)は、社会的スキルと不登校感情の関係を検討し、規律性スキル、社会的働きかけスキル、主張性スキルを獲得している生徒ほど、不登校感情を経験することが少ないことを明らかにした。さらに、社会的スキルと不登校傾向行動との関連も検討したところ、不登校傾向行動を示す生徒は示さない生徒よりも、規律性スキル、社会的働きかけスキル、葛藤解決スキルが低いことを示した。不登校傾向行動について、不登校感情との間には関連が見られなかった葛藤解決スキルとの関連が見られたことに対して、江村・岡安は不登校感情を感じていても不登校行動に移行するかどうかは、友人との間で起こる葛藤をうまく解決できるかどうかの差であることが考えられると考察している。また、不登校感情と不登校傾向行動に関連する社会的スキルが異なることから、不登校感情を抑制する要因と欠席行動を抑制する要因が異なる可能性についても指摘している。

登校している生徒と不登校生徒のソーシャルサポートの違いについては、中学生および高校生を対象とした研究の報告があり、中学生においても高校生においても、不登校傾向の見られる生徒は登校している生徒に比べて知覚されるソーシャルサポートが低いことが一貫して示されている(赤塚・岩元, 2009; 菊島, 1997, 1999; 渡辺・蒲田, 1999)。社会的スキルとソーシャルサポートの関係については、社会的スキルが高い生徒ほどサポートを受ける量や満足度が高いことがわかっているが、不登校児の場合はたとえ社会的スキルが高いと認知していても、友人からのサポートが少なくサポートに対する満足度も低いことが明らかになっている(渡辺・蒲田, 1999)。このような違いが見られた理由として、ひとつは渡辺らも指摘しているよう

に、不登校生徒は友人と関わる機会そのものが少なく、友人からサポートを得ることができない状況にあることが考えられる。もう一つの可能性としては、登校している生徒と不登校生徒とで、ソーシャルサポートを高めることに関わる社会的スキルに違いがある可能性が考えられる。

渡辺・蒲田(1999)の研究では、登校している生徒と不登校生徒で、サポート源の違いが見られることを明らかにしており、登校生徒は友人からのサポートが多くを占めるのに対し、不登校生徒は親、身内、知人、先生からのサポートの割合が高かった。どのようなサポート源からサポートを得るかによって、有効に働く社会的スキルにも違いが見られることが考えられるが、渡辺らの研究ではソーシャルサポートと具体的なスキルとの関連については検討されていない。そこで、本研究の3つめの目的としては、まず一般高校生と学校不適応の履歴のある青年の社会的スキルおよびソーシャルサポートを比較して違いが見られるかを検討し、また社会的スキルとソーシャルサポートとの関係にも違いが見られるかを検討する。

方 法

調査対象者 大阪府下の公立高校1年生40名(男子19名、女子21名)と、大阪府下の児童自立支援施設に入所する不登校・ひきこもりの履歴のある青年31名(男子20名、女子11名、平均年齢16歳)が本研究の調査対象者であった。

手続き 複数の尺度から構成された質問紙を作成し、高校および児童自立支援施設にて実施した。質問紙の配布と回収は、担任教師あるいは施設職員が行った。

質問紙の構成 ①日本版学校肯定感・回避感尺度(日本版SLAQ):Ladd & Price(1987)のSchool Liking and Avoidance Questionnaire(SLAQ)を大対ら(2006)によって日本語訳して作成されたもので、信頼性と妥当性が確認されている。尺度は学校肯定感

(school liking)9項目と学校回避感(school avoidance)5項目の2つの下位尺度から構成されていた。回答形式は「全くあてはまらない」(1点)～「とてもあてはまる」(5点)までの5件法で、下位尺度ごとに平均値を求めて得点とした。

②高校生活適応感尺度:浅川・森井・古川・上地(2002)によって開発された尺度であり、信頼性と妥当性が確認されている。本研究では尺度に含まれる下位尺度の中で、「部活動への意欲」「家族関係」「教師との関係」「学業への意欲」「友人関係」の5つの下位尺度を用いた。質問項目は合計37項目であり、回答形式は「全くあてはまらない」(1点)～「とてもあてはまる」(5点)の5件法であった。下位尺度ごとに平均値を求めて得点とした。

③社会的スキル尺度:嶋田(1998)の尺度で、「向社会的スキル」「引っこみ思案行動」「攻撃行動」の3つの下位尺度、合計25項目から成る尺度を用いた。また、上野・岡田(2006)のソーシャルスキル尺度のうち「アサーション」の下位尺度8項目を加えた。回答形式はいずれも、「全くあてはまらない」(1点)～「とてもあてはまる」(4点)の4件法であり、下位尺度ごとに合計点を求めて得点とした。

④ソーシャルサポート尺度:久田・千田・箕口(1989)が開発した学生用ソーシャル・サポート尺度(The Scale of Expectancy for Social Support; SESS)の16項目を、岡安・嶋田・坂野(1993)が中学生用に一部項目の表現を修正したものを用いた。尺度の信頼性および妥当性については、久田ら(1989)および箕口・千田・久田(1989)により確認されている。SESSは知覚されたサポートを測定するものであり、5つのサポート源(父親、母親、きょうだい、学校の先生、友人)からそれぞれ、将来どの程度援助が期待できるかを評定する形式をとっているが、本研究ではサポート源を区別せず、「周りの人たち(家族・先生・友達など)」からどの程度援助が期待できるかについて、「絶対にちがう」(1点)～「絶対にそうだ」(4点)の4件法で評定させた。全16項目の合

計点を、ソーシャルサポートの得点とした。

高校生には①～④の全ての尺度、児童自立支援施設の青年には③と④の尺度のみ実施した。

結果

各尺度の記述統計量および内的整合性の検討

本研究で用いた尺度について、尺度ごとに全対象者の平均値と標準偏差を求めた (Table 1)。また、尺度の内的整合性についても検討するため、 α 係数を求めた。 α 係数で示されたように、ほとんどの尺度については α 係数が .7 以上あり、十分な信頼性が認められた。社会的スキルの「引っ込み思案」のみ、 α 係数が低く尺度の信頼性が十分なものではないことが示さ

れていた。

高校生の学校肯定感・回避感に関わる要因の検討 「学校がどれくらい好きか」を表す学校肯定感と、「学校にどれくらい行きたくないと思っているか」を表す学校回避感が、それぞれ高校生活におけるどのような要因と関連しているのかを検討するために、日本版 SLAQ の 2 つの下位尺度の得点を目的変数、高校生活適応感尺度の 5 つの下位尺度の得点を説明変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った (Table 2)。

学校肯定感については、「友人関係」と「部活動への意欲」から有意な正の影響が見られた。学校回避感については、「部活動への意欲」のみ、有意な負の影響が見られた。以上の結果

Table 1 各尺度の平均値および標準偏差と α 係数

	尺度	N	平均値	標準偏差	α
SLAQ	学校肯定感	40	2.89	0.90	.899
	学校回避感	40	3.34	0.97	.808
高校生活適応感	部活意欲	29	3.82	1.14	.947
	家族関係	39	3.53	0.96	.899
	教師との関係	40	2.85	0.78	.770
	学業	40	2.83	0.68	.715
	友人関係	40	3.45	0.91	.840
社会的スキル	アサーション	68	19.46	4.02	.775
	向社会的行動	68	29.26	4.80	.822
	引っ込み思案	68	17.13	3.89	.669
	攻撃行動	68	12.49	4.05	.850
ソーシャルサポート		67	45.35	10.47	.955

Note. SLAQ および高校生活適応感尺度は、高校生のみ回答してもらった。その他の尺度については、高校生および不登校生徒の両方に回答してもらった。N が尺度ごとに異なるのは、欠損値のある対象者を分析対象から省いたためである。

Table 2 学校肯定感・回避感に関連する要因

	学校肯定感 β	学校回避感 β
友人関係	.497**	—
部活動への意欲	.358*	-.419*
重相関係数	.451**	.175*

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

より、高校生活において友人関係に満足しており、部活動への意欲が高いほど「学校が楽しい」という学校肯定感が高く、部活動への意欲が低いほど「学校へ行きたくない」という学校回避感が高まることがわかった。また、学校肯定感に対しては、大久保（2005）の研究結果と同様に、検討した5つの要因の中で友人関係が最も強く影響を及ぼしている要因であることが明らかになった。

高校生の学校肯定感と社会的スキルおよびソーシャルサポートとの関連：媒介モデルの検証 学校肯定感には友人関係が強く影響を及ぼしていることが本研究の結果からも示されたが、友人関係に関わる要因である、社会的スキルとソーシャルサポートが学校肯定感にどのように関連しているかについて検討した。「学校が好きである」という学校肯定感を高めることを目的とした介入を行う場合、社会的スキルを高めることが学校肯定感の向上に直結するのか、あるいは社会的スキルが高まることで周囲からのサポート体制が高まったという環境の変化を知覚することが重要であるのかを明らかにするため、ソーシャルサポートが社会的スキルと学校肯定感の関係を媒介しているという媒介モデルの検証を Baron & Kenny (1986) に示された方法に基づき行った (Figure 1)。

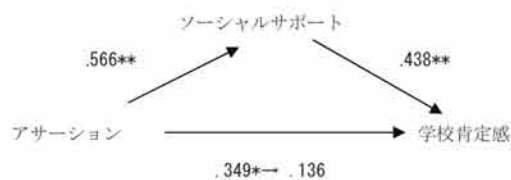


Figure 1 ソーシャルサポートがアサーションと学校肯定感の関係を媒介変数となっているという媒介モデルの検証
Note. ** $p < .01$, * $p < .05$

まず、社会的スキルに含まれる4つの下位尺度（向社会的行動、引っこみ思案行動、攻撃行動、アサーション）のそれぞれを説明変数、ソーシャルサポートを目的変数とした回帰分析を行い、次に社会的スキルの4つの下位尺度それぞれを説明変数、学校肯定感を目的変数

とした回帰分析を行った。その結果、ソーシャルサポートと学校肯定感の両方を有意に予測したのはアサーションのみであり、アサーションからソーシャルサポートへの標準偏回帰係数 β は.566 ($R^2 = .32, F(1/37) = 17.46, p < .01$)、アサーションから学校肯定感への標準偏回帰係数 β は.349 ($R^2 = .12, F(1/37) = 5.28, p < .05$)であった。そこで、ソーシャルサポートとアサーションの両方を説明変数、学校肯定感を目的変数として重回帰分析を行ったところ結果は有意で ($R^2 = .28, F(2/36) = 6.94, p < .01$)、ソーシャルサポートを説明変数とした場合の標準偏回帰係数 β は.438で有意であったのに対し、アサーションを説明変数とした場合の標準偏回帰係数 β は.136で有意ではなかった。以上の結果より、アサーションから学校肯定感を予測する標準偏回帰係数が、ソーシャルサポートを媒介することで有意ではなくなったことから、ソーシャルサポートはアサーションと学校肯定感の関係を媒介していることが示された。

一般高校生と不登校生徒の社会的スキルおよびソーシャルサポートの違い 高校に通えている一般高校生と、不登校・ひきこもり等の理由で学校に通えていない青年では、社会的スキルおよびソーシャルサポートの違いが見られるのかを検討した。社会的スキルの4つの下位尺度（向社会的行動、引っこみ思案行動、攻撃行動、アサーション）とソーシャルサポートの得点について t 検定を行った結果、社会的スキルのアサーションと攻撃行動、またソーシャルサポートにおいて有意な傾向で差が見られた (Table 3)。

アサーションについては、一般高校生の方が不登校生徒よりも有意な傾向で得点が高かったのに対し、攻撃行動については、不登校生徒の方が一般高校生よりも有意な傾向で得点が高かった。ソーシャルサポートについては、不登校生徒よりも一般高校生の方が知覚しているサポートが有意な傾向で高いことが分かった。向社会的行動と引っこみ思案行動については、一般高校生と不登校生徒の間に有意な差は見られ

Table 3 一般高校生と不登校生徒の社会的スキルおよびソーシャルサポート

	一般高校生 平均値 (SD)	不登校生徒 平均値 (SD)	<i>t</i>
社会的スキル			
アサーション	20.2 (3.8)	18.4 (4.1)	1.79 †
向社会的行動	30.0 (4.4)	28.2 (5.2)	1.49
引っこみ思案行動	16.9 (3.6)	17.5 (4.3)	0.71
攻撃行動	11.8 (4.1)	13.5 (3.8)	1.81 †
ソーシャルサポート	47.4 (10.5)	42.5 (9.9)	1.92 †

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .1$

なかった。

また、社会的スキルの4つの下位尺度とソーシャルサポートの相関を、一般高校生と不登校生徒のそれぞれで求めたところ、Table 4に示すような結果となった。一般高校生において、ソーシャルサポートとの間に有意な相関がみられたのは、アサーションと攻撃行動であり、アサーションスキルが高い高校生ほど、知覚されるソーシャルサポートは高く、攻撃行動が高いほど、知覚されるソーシャルサポートが低いということが分かった。一方、不登校生徒については、アサーションおよび向社会的行動とソ

シャルサポートとの間に有意な正の相関が見られ、これらの得点が高い生徒ほど知覚されるソーシャルサポートが高いことが分かった。以上のように、知覚されるソーシャルサポートに関係している社会的スキルとして、アサーションスキルは一般高校生と不登校生徒に共通していたが、向社会的行動については、不登校生徒のみにおいてソーシャルサポートとの相関が見られた。また、攻撃行動については、一般高校生ではソーシャルサポートの低さに関連していたのに対し、不登校生徒においてはそのような関連は見られなかった。

Table 4 社会的スキルとソーシャルサポートの相関の比較

	アサーション	向社会的行動	引っこみ思案	攻撃	ソーシャルサポート
アサーション	---	.483**	-.171	.017	.566**
向社会的行動	.587**	---	-.079	-.237	.222
引っこみ思案	-.125	-.351	---	.111	-.109
攻撃	.099	-.061	-.193	---	-.360*
ソーシャルサポート	.474*	.636**	-.276	-.243	---

Note. ** $p < .01$, * $p < .05$.

右上：一般高校生，左下：不登校生徒

考 察

高校生の学校適応に関わる要因についての検討 「学校が楽しい」「学校に行くのが好きである」という程度を表す学校肯定感と最も強く関わる要因は「友人関係」であった。本研究では、1つの高校の1学級の生徒のみを対象としていたが、大久保(2005)の研究で特徴の異なる複数の高校を対象とした場合にも、友人関係が共通して学校適応感に強く関連する要因であることが示されており、本研究の結果はそれに一致するものであった。大久保の研究では、学校適応感に関わるものとして「友人との関係」「教師との関係」「学業」という3つの要因について検討していたが、本研究ではさらに範囲を広げて「家族関係」「部活動への意欲」についても加えて検討した。その中で「部活動への意欲」は学校肯定感・回避感に共通して関連する要因であり、部活動に意欲的に取り組むことは、学校肯定感を高め、かつ学校回避感を低める可能性が示唆された。ただし、大久保の研究において「友人との関係」以外の要因については、学校適応感との関連に学校間で違いが見られたように、この「部活動への意欲」についても調査対象となった学校が部活動に熱心に取り組んでいるかどうかなどによって、学校適応感への影響の仕方が変わってくるものが考えられる。また、対象者の中でも部活動に参加している者とそうでない者がいるため、この結果を高校生全般を表す結果として一般化するには、さらに検討が必要だろう。

高校生の学校肯定感と社会的スキルおよびソーシャルサポートとの関連 社会的スキルの中でも、アサーションスキルが高い生徒ほど学校肯定感が高いことが示された。したがって、学校不適応の予防を目的とした介入として、アサーションスキルをトレーニングすることが有効であると考えられる。ただし、媒介モデルの検証により、アサーションスキルと学校肯定感との関係には、ソーシャルサポートが媒介していることが明らかになった。つまりこれは、アサーションスキルの向上によって、知覚されて

いる周囲からのサポートが高まるということが、学校を居心地がいい場所だと感じる学校肯定感の向上につながることを意味している。言い換えれば、アサーションスキルという個人の行動そのものの変化だけでなく、個人と個人をとりまく友人との相互作用が変化することが、学校肯定感の向上には重要だと言える。トレーニングによりアサーションスキルが高まったとしても、それが友人との相互作用の中で上手く機能せず、ソーシャルサポートを高めることにつながらなければ、学校肯定感は向上しないだろう。逆に、スキルをトレーニングするのではなく、学級集団という環境にアプローチをすることで、お互いにサポートをする環境を整えていくことが、学校肯定感の向上につながる有効な介入となる可能性もある。したがって、本研究の結果から示唆される、学校適応向上のために有効な介入としては、ソーシャルサポートを高めることにつながるアサーションスキルのトレーニングと、ソーシャルサポート環境そのものを高めるような集団へのアプローチの2つの方向性が考えられる。前者のアサーションスキルのトレーニングについては、すでにいくつかの研究が行われており、不適応に対する予防効果についても検討されている(内田ら, 2009)。一方、後者の環境へのアプローチについては、その効果についての検討を行った研究は見当たらないため、介入の可能性を広げるためにも今後検討していくことが期待される。

一般高校生と不登校生徒の社会的スキルおよびソーシャルサポートの違い 一般高校生に比べ、不登校生徒はアサーションスキルやソーシャルサポートが低い傾向が見られ、これは先行研究とも一致した結果であった。特に、アサーションスキルやソーシャルサポートは学校肯定感とも強く関連するものであるため、不登校やひきこもりといった学校不適応を呈する青年への支援として、アサーションスキルやソーシャルサポートを高める介入は重要であると言える。

その他に見られた違いとして、不登校生徒は

一般高校生に比べ、攻撃行動が高い傾向が見られた。社会的スキルとソーシャルサポートの相関では、一般高校生においては攻撃行動が低いほど知覚されるソーシャルサポートが高いという結果が得られたのに対し、不登校生徒においては攻撃行動とソーシャルサポートに関連は見られなかった。また、向社会的行動とソーシャルサポートとの関連では、不登校生徒においては向社会的行動が高い生徒ほど知覚されるソーシャルサポートも高くなるという結果であったのに対し、一般高校生ではそのような関連は見られなかった。つまり、アサーション以外の社会的スキルに関しては、どのスキルがソーシャルサポートと関連するかということが、一般高校生と不登校生徒で異なっていた。このような違いが見られたことには、渡辺・蒲田(1999)の研究でも指摘されているように、一般高校生と不登校生徒でソーシャルサポートのサポート源に違いがあることが関係しているのかもしれない。渡辺・蒲田によれば、一般高校生は主に友人をサポート源とするのに対し、不登校生徒は友人以外の親や教師といった人をサポート源とすることがわかっている。サポート源の違いによって、ソーシャルサポートを得ることに有効に働く社会的スキルも異なる可能性を考えると、一般高校生が友人からのサポートを得るために有効なのはアサーションスキルが高いことと攻撃行動が低いことであると言える。また、不登校生徒が親や教師などからサポートを得るために有効なのは、アサーションスキルが高いことと、向社会的行動が高いことであると言える。サポート源がこのような異なることは、一般高校生と不登校生徒のおかれた環境の違いから考えると当然であり、不登校生徒は学校へ行っていない状況の中で、自分にとっての最も有効なサポート源は友人以外の周りの大人ということになるのであろう。

この結果から、注意深く読みとらなければいけないことは、不登校生徒に対して学校への復帰を支援するためにSSTを行う場合、不登校生徒のみを対象にアセスメントを実施して、ソーシャルサポートと関連する向社会的スキル

を標的スキルとして選定しトレーニングすることは、必ずしも高校へ復帰した後に必要とされるスキルをトレーニングしていることにはならないという点である。したがって、有効で適切な介入を行うためには、不登校生徒をアセスメントするだけでなく、その結果が一般高校生の示すものとどの程度乖離しているのかについても併せて検討しておく必要がある。高校生の不登校については研究の数が少なく、通学できている生徒の中で学校肯定感や学校回避感が高い者と低い者の違いは何か、学校回避感を抱いて通学している生徒と不登校に至る生徒の違いは何か、という視点に立った実態把握もまだ十分にはできていない。今後、このような視点からの研究が進められる必要がある。

本研究の結果からアサーションスキルは一般高校生の不登校予防にも、また不登校の状態にある生徒への学校復帰支援にも、有効な標的スキルであることが示唆された。これまでの研究においても、主張性は青年期の友人関係を良好にする上で重要な役割を果たすものであることが示されてきている(柴橋, 1998)。しかし、渡部(2009, 2010)は、主張性を「素直な表現」「情動制御」「他者配慮」「主体性」という4つの視点から捉えた場合、この中でも特に「他者配慮」は精神的適応と、「主体性」は友人に対する配慮行動や対人ストレスイベントと曲線的関係にあることを明らかにしている。すなわち、主張性のある特定の側面が極端に高いもしくは低い場合には、高校生の精神的適応や友人関係にマイナスの影響を及ぼし得るということである。一方で、「素直な表現」と「情動制御」は、得点が高いほど適応が良好であることが示されている。したがって、高校生を対象にアサーショントレーニングを行う場合には、適度な「他者配慮」や「主体性」を維持しながら、感情をコントロールして素直に自分の考えや気持ちを表現するという、かなり高度な主張性を教える必要があると言える。その際に、高校生の仲間関係の現状に沿った適切な介入ができていのかどうかを確かめる一つの方法が、ソーシャルサポートの変化であるかもしれない。行

動の変化に伴って、本人が知覚できる程度に仲間との相互作用のあり方に変化が生じたかを確かめることで、その時の介入が本当に有効なものであったかどうか確かめられるだろう。

今後の課題 本研究は、研究対象とすることが困難である高校生年齢の不登校・ひきこもりを呈する生徒を一般高校生と比較するという、貴重な結果を示したものであったが、研究対象者の数は一般高校生が40名、不登校生徒数が31名と非常に少なかったため、本研究の結果が一般化できるものであると言うためにはさらに対象者数を増やして検討を重ねる必要がある。

引用文献

- 赤塚史・岩元澄子 (2009). 不登校高校生の不安とソーシャルサポートに関する研究 久留米大学心理学研究, **8**, 53-60.
- 浅川潔司・東由佳・古川雅文 (2001). 青年期の社会的スキルと学校適応に関する心理学的研究 兵庫教育大学研究紀要 第1分冊 学校教育・幼年教育・教育臨床・障害児教育, **21**, 99-103.
- 浅川潔司・森井洋子・古川雅文・上地安昭 (2002). 高校生の学校生活適応感に関する研究 - 高校生活適応感尺度作成の試み - 兵庫教育大学研究紀要, **22**, 37-40.
- Baron, R. M. & Kenny, D. A. (1986). The moderator-mediator variable distinction in social psychological research: Conceptual, strategic, and statistical considerations. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1173-1182.
- 江村理奈・岡安孝弘 (2003). 中学校における集団社会的スキル教育の実践的研究 教育心理学研究, **51**, 339-350.
- 古屋健・佐々木悠・音山若穂・坂田成輝 (2007). 高校生の心理的ストレス過程に関する研究: II 心理社会的ストレスの分析 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, **56**, 279-298.
- 久田満・千田茂博・箕口雅博 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143-144.
- 菊島勝也 (1997). 不登校傾向におけるストレスとソーシャルサポートの研究 健康心理学研究, **10**, 11-20.
- 菊島勝也 (1999). ストレスとソーシャルサポートが中学時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, **7**, 66-76.
- Ladd, G. W., & Price, J. M. (1987). Predicting children's social and school adjustment following the transition from preschool to kindergarten. *Child Development*, **58**, 1168-1189.
- 牧野幸志 (2006). 高校生のソーシャルサポートと精神的健康に関する教育心理学的研究 - 現役高校生と現役大学生との比較 - 摂南大学経営情報研究, **14**, 1-11.
- 箕口雅博・千田茂博・久田満 (1989). 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み (2) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 145-146.
- 文部科学省 (2010). 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 平成21年度小・中学校の不登校の確定値及び暴力行為、いじめ、高校不登校、高校中退の訂正值 4. 高等学校の不登校の状況【訂正值】文部科学省 2010年12月22日
- <<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001069076>> (2011年4月13日)
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 (1993). 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-212.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, **53**, 307-319.
- 大対香奈子・堀田美佐緒・竹島克典・松見淳子・Ladd, G. W. (2006). 日本版学校肯定感質問紙 (SLAQ) の作成 日本社会心理学会第47回大会発表論文集, 796-797.
- 佐藤正二・佐藤容子・岡安孝弘・高山巖

- (2000). 子どもの社会的スキル訓練－現状と課題－ 宮崎大学教育文化学部紀要 教育科学, **3**, 81-105.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 嶋田洋徳 (1998). 小中学生の心理的ストレスと学校適応に関する研究 風間書房
- 曾山和彦・本間恵美子・谷口清 (2004). 不登校中学生のセルフエスティーム、社会的スキルがストレス反応に及ぼす影響 特殊教育学研究, **42**, 23-33.
- 戸田雅子 (2004). 青年期の登校回避感情について－対人関係及びパーソナリティの視点から－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, **51**, 312-314.
- 朝重香織・小椋たみ子 (2001). 不登校生の心理について－普通学校中学生との比較から－ 神戸大学発達科学部研究紀要, **8**, 1-12.
- 内田香奈子・岡元義彦・濱紀子・加茂尚子・貴志知恵子・山崎勝之 (2009). 対人コミュニケーションスキル向上を目指したユニバーサル予防教育の開発と効果の検証－高校生を対象としたアサーショントレーニングを中心に－ 鳴門教育大学学校教育研究紀要, **24**, 63-72.
- 上野一彦・岡田智 (2006). 特別支援教育 実践ソーシャルスキルマニュアル 東京：明治図書
- 山下みどり・清原浩 (2004). 高校生にみる不登校傾向に関する研究－意識調査を通して－ 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, **14**, 21-38.
- 渡部麻美 (2009). 高校生における主張性の4要件と精神的適応との関連 心理学研究, **80**, 48-53.
- 渡部麻美 (2010). 高校生の主張性の4要件と友人関係における行動および適応との関連 心理学研究, **81**, 56-62.
- 渡辺弥生・蒲田いずみ (1999). 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル－登校児と不登校児の比較－ 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), **49**, 337-351.